1.17 混沌　そのとき学生は

1995年1月17日の午前5時46分、関西は揺れた。関西学院大は学生15人、甲南大では16人が亡くなった。特に大きな被害があったのが神戸大だ。学生44人が亡くなり、負傷者は教職員・学生合わせて500人を越えた。「そのとき」、学生は何を感じ、どう動いたのか。そして「それから」の復興の歩みは。神戸大と関学の当時を振り返った。

西尾荘の焼け跡。神戸大生３人が亡くなった（神戸大学ニュースネット委員会）

神戸大

突如あらわれた非日常　コートひとつひっかけて

発災後、ニュースネット委員会が出した第一報にはこうある。「1月17日午前5時46分、近畿地方を襲った兵庫県南部沖地震で、神大には、付近の学生や住民約三百人が避難している。（中略）学内の研究室や図書館などでは、本棚などあらゆるものが倒れている」。自然科学棟七階にいた人のコメントとして「揺れた瞬間、机の下にもぐったら左右の棚やコンピュータが落ちてきた」。

ニュースネット委員会の初代編集長であり、当時自然科学研究科修士1年生だった里田明美さんは、神戸市灘区高羽町の下宿で被災。突き上げるような揺れに飛び起きた。コートひとつひっかけて街に出ると、足元のコンクリートはひび割れ、近隣住民が「おばあちゃんが出てこない！」と嘆く声が。

午前8時30分ごろ、様子を確認しに大学へ向かった。建物に目立った被害は見られなかったものの、理学部棟では転落したコンピュータを片付ける人の姿。その場にいた学生からは「部屋が全壊した」「2階が1階になった」など悲惨な声が聞かれた。知人を見かけると、生きてただけで「良かった、良かった」と抱き合うような異様な状況だった。

混乱のなか9時ごろ、神戸大生協「ランス」はいちはやく店を開けた。里田さんはランスでカップ麺を購入。店員はレジの代わりに電卓で計算した。すぐに食べられる食パンなどは売り切れていた。

神戸大のキャンパスからは普段は神戸の美しい街並みが見渡せる。だが、この時は所々から煙が上がっていた。にもかかわらず、サイレンの音が聞こえず静まりかえっていた。

11時ごろ、所属していた研究室の先輩が雑炊をつくってくれた。次にいつ食べられるか分からない不安のなか、みんなで分け合って食べた雑炊は「ものすごく美味しかった」。

午後からは見下ろす街にサイレンが鳴り始め、それは鳴り止まなかった。里田さんは所属していた研究室の友人4人で、貯水タンクがあり電気の通っている友人の下宿に避難。いつ打開されるとも分からない状況に不安は募ったという。

当時法学部の2年生だった村上友章さんは、宝塚市の実家で被災した。実家は半壊。当日大学へ向かおうにも電車が動いておらず「とてもいける状況じゃなかった」。

しかし、翌日18日、報道で死者の数が増え続ける状況に、大学の方に住む友人の安否が気がかりで自転車で大学へ向かった。しかし阪急六甲駅近辺に差し掛かったあたりで思いのほか建物の被害が小さいことに気づく。「（神戸大のある）山の上の方は大丈夫だろう」と判断し、大学まではいかなかった。実際、神戸大近辺などと比べ、駅舎が落ちたJR六甲道駅などと標高の低い地域は建物の倒壊が目立って激しかった。

村上さんはしばらくの後、授業がなくなり期末試験が全てレポートになったことを知った。大学として1月30日に初めての登校日が設けられ、「お互いの無事を喜びあう一方、友人の死を悲しむ姿も」とニュースネット委員会は報じているが、村上さんが登校したのは、結局、春になってからだった。

神戸大の被災は受験生にも不安を与えた。現在「ちんどん通信社　東西屋」でプロのちんどん屋として活躍する内野真さんは、神戸大の後期試験を受験した。会場は大阪大だった。入学試験は神戸大のほか阪大、岡山大でも実施された。

内野さんは静岡出身。3月末の入学手続きの時に、父と2人でJRの代行バスに揺られながら、粉塵の舞う神戸の地に足を踏み入れた。比較的家賃の低い家はほとんど倒壊し、無事な家もほとんど入居者でいっぱいだったため、下宿探しは難航した。京都や岡山から来る学生は、下宿が足りないため、実家から通うように言われたという。

4月1日から神戸に住むことになった内野さんは、およそ1週間、高校の修学旅行以来となる神戸の街を、あちこち見て回った。高校時代に見た風景は跡形もなく、震災から3カ月経っていたが、がれきの山が所々に見られた。

4月10日、関学などが授業開始を遅らせるなか、例年通り授業を開始。入学してほどなく内野さんは「学生震災救援隊」に入った。

当時、神戸大は建物の被害が少なく、電気も食料もあったため、避難所指定されていないにも関わらず、多くの人が避難してきた。救援隊はそのなかから自発的に生まれた団体だ。内野さんが入学した時点でも、まだ避難している人が体育館に残っており、初めは仮設風呂用の薪割りや子どもの世話などをしていた。

内野さんはその後、紆余曲折を経てちんどん屋サークル「神大モダン・ドンチキ」の創設などに関わることになる。

混沌から立ち上がっていった神戸大。教訓を生かして都市安全研究センターの設立、学生ボランティア支援室の設置など様々なかたちで災害・防災に取り組む大学となっていった。

関学

学生・教職員が一体に　奉仕の精神がいきる

神戸大六甲台グラウンドに駐屯する自衛隊（神戸大学ニュースネット委員会）

上ヶ原、甲東園、仁川では大きな被害が出たにも関わらず、キャンパスへの被害はほとんどなかった関学。発生直後から大きな支援に乗り出した。18日には新学生会館を避難所として開放し、下宿を失った学生のほか近隣の住民を受け入れた。利用者は最大で1日180人、3月末までの延べ利用者は5000人を数えたという。

くわえて大規模なボランティア活動を展開。始まりは学生の自発的な動きからだった。発生直後からアメリカンフットボール部や野球部など体育会の学生による周辺の夜警や交通整理が行われたほか、水道の止まった学生会館のトイレの水を流すために地下のプールから水を汲んでくるなど学生自ら率先して行った。このような学生の熱意に応えるために大学は「関西学院救援ボランティア委員会」を設立し、ボランティアを申し出る学生を受け入れた。委員会に登録した学生は、他大学生を含め、2500人。近隣の避難所への派遣のほか、救援物資の仕分けなどの大規模な活動に取り組んだ。委員会の事務作業も学生が行うなど教職員と学生が一体となって活動した。

関学がこれほど大規模な活動を行えた背景には何があったのか。まず被害の大きな地域の東端であったため情報も物資も、人も届きやすかったことがあげられる。だがそれに加え、学院のスクールモットー「マスタリー・フォア・サービス（奉仕のための練達）」が学生や教職員にも少なからず根付いていたことが大きい。学生・教職員・スクールモットーが一体となれたことでこのような救援活動が実現したと言える。東日本大震災の直後からも関学に関係する多くの団体が救援活動をしている。その活動の根底にあるものは、17年前の震災のときと変わらないのかもしれない。

遺族が語る 3.11

「当時に戻ったみたい」

当時、神戸大学法学部の2年生だった加藤貴光さんを亡くした母・加藤律子さんは、阪神・淡路大震災以降、講演を通して自身の経験を語り続けている。3月11日当日も朝早くから講演の仕事があった。前日からホテルに泊まって準備しており、午前中に講演が終わった。

自宅に帰ってパソコンをつけてインターネットを見てみると、モニターには「東北で地震が起きました。津波に注意してください」と表示されていた。

大変だと思いテレビをつけてしばらく見ていると、津波で地面が飲み込まれていく様子がリアルタイムで映し出されていた。

その様子にあっけにとられると同時に、阪神・淡路大震災で現地に行った時のことがフラッシュバックした。耐え切れずにベッドで横になった。その後3日間はそのまま起き上がることができなかった。17年前に戻ったようだった。

加藤さんは1・17以降、周りの人の支えや、講演などで自分の経験や気持ちを話すことで、徐々に気持ちが楽になっていった。それでも震災で息子を亡くした「悲しみ」は17年たった今も決して消えない。むしろ一人息子が亡くなったことで、新たな悲しみが生まれてくることもあるという。

学生へはこう話す。「とにかく忘れずに覚えておいてほしい。（死者を）自分の心の中で生き続けさせることもできる」。

編集後記

大多数の人の間では「震災」といえばすでに東日本大震災となっている。この度のアンケートでそんな結果が浮かび上がった。

当然といえば当然だ。この号外も東日本大震災が起こったのに、なぜ今さら阪神・淡路大震災なのかという声もあるかもしれない。

しかし、阪神・淡路大震災の取材をしていると今も苦しむ犠牲者の遺族や友人に出会う。自身は当時の記憶をもたないにも関わらず震災を伝える学生、教訓を受け継ごうとする教員もいる。そんな人々と出会うたび、過去のことと流してはならないと感じる。

阪神・淡路大震災は今なおその影響をもち続けている。

この国では絶え間なく地震が起こっており、これからも起こり続ける。だからといって続く災禍への関心を「上書き保存」のように次々と塗り替えていっても良いのだろうか。

1月17日の今日だけは、せめて今日くらいは17年前にこの地を襲った震災について少しでも思いを巡らせたい。それだけでも何かが変わると信じている。この号外をその一助にしてもらいたい。

末筆となりましたがご協賛をいただいた方々、取材に協力していただいた方々に厚く御礼申し上げます。【田中郁考】

ご協賛いただいた皆様

株式会社　朝日新聞大阪本社

Atelier Parfum
美容院アトリエパルファン

ASA 神戸なだ

長田商店街

UNN関西学生報道連盟

UNN 関西学生報道連盟は、関西圏所在の９大学の報道サークルで組織されており、大学や大学生に関わることを対象として取材活動をし、年に５回新聞を発行しているほか、ウェブサイト上でより新しい情報を発信しております。

UNN 加盟ローカル一覧

神戸大学ニュースネット委員会	関学新月 Tribune	NEWS 立命
大阪大学 POST	関大タイムス	神戸女学院大 K.C.Press
京都大学 EXPRESS	同志社 PRESS	京都女子大 藤花通信